

KEYWORD

【刑事訴訟法】

基本六法(憲法、民法、刑法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法)の1つで、刑事裁判のルール・手続について定めた法律。

**小** 学生が裁判官の席に座り、被告に判決を言い渡す。これは四国ロースクールが、香川大学教育学部附属高松小学校6年生を対象に行っている「ジュニア・ロースクール」の一場面。四国ロースクールの学生が行う、刑事事件を素材とした模擬裁判に小学生も参加することで、司法制度への理解を深めてもらうという試みです。その場で被告役を演じながら指導を行っているのが、京准教授。京准教授は、ジュニア・ロースクールは、四国ロースクールの学生にも意味があると考えています。「模擬裁判で扱うのは、自転車泥棒など簡単な事件ですが、法律のことを小学生にもわかるように説明するのは案外難しいんです。法律への深い理解が求められます」

わかりやすい言葉に言い換えられるかどうかで自分の理解度を確認してほしいというのが、隠された狙いです。その京准教授の専門は「刑事訴訟法」。四国ロースクールで同法を教えながら、自身の研究も続けています。被疑者の取調べの問題を中心に研究している京准教授は、最近の刑事裁判において、自白調書への依存が見直されるようになってきたことにも注目しています。特に裁判員裁判では、自白調書を中心にして審理を進めるよりも、裁判の場で直接本人や関係者に話を聞くというケースが増えているそうですが、その背景にあるのは、裁判員制度導入により高まった、裁判や法律に対する国民の関心。誰もが裁く側に立つ可能性が生まれたことで、「今まで以上に、えん罪を身近な問題として考える機運が高まっているのではないかと分析しています」

研究熱心な京准教授ですが、意外なことに「大学生の頃は、『研究者になるんだ!』という確固たる意志は持っていなかった」と振り返ります。大学院に進みながらも、何度も挫折しながら、師と呼べる人の勧めもあって研究の道に踏みとどまりました。研究と論文作成の日々の中で、自分のやりたいことと社会のニーズの接点としてたどり着いた研究領域が「刑事訴訟法」です。「法学に限らず、研究では『なぜなのか?』をひたすら繰り返していきます。やがてその先に大きな壁が見えてくる。この壁を乗り越えるとき、視野が開けるかのようにひらめきが訪れます。でも簡単ではありません。1%のひらめき

京  
明

PROFILE

きょう あきら  
香川大学大学院  
香川大学・愛媛大学連合法務研究科  
准教授 博士(法学)  
専門分野: 刑事訴訟法  
少年法



2010年11月~12月にかけて3回ほど行われた「ジュニア・ロースクール」。この試みはさまざまなメディアでも取り上げられました。



「刑事訴訟法、中でも刑事裁判について興味を深めたい方は、DVDを見てみては」と京准教授。おすすめをピックアップしてもらいました。



1%のひらめきのために  
99%の努力を続ける

法律は平和に生きるための道具



# つながる情報工学

## 人と

**Y** outubeのような動画投稿サイトやソーシャルネットワークサービスなど、個人が情報をやりとりする仕組みは近年めざましい勢いで定着しつつあります。しかし誰もが情報を発信できると、かえって知りたいたいことが『情報の洪水』に埋もれて活用できなくなってしまうことも、日常生活において見逃せない重要情報を取りこぼさず、なおかつ、大切な個人情報を守らさないようにもしたいといけません。

そんな問題に対して、垂水浩幸教授、土井健司教授、社会人学生であり有限会社電マーク(高松市代表取締役)の中野裕介さんが提案したのが、今年、総務省の「戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)」の地域ICT振興型研究開発プログラムに採択された「小規模マイクロブログとクロスインタフェースの研究開発」。気楽に読み書きできるツイッターの仕組みを使い、書き込みの公開や利用者を制限できる「小規模マイクロブログサービス」を開発・提供することで、効率よく安全に情報の共有を行う試みです。

さまざまに議論されてきましたが、今回の研究はICカードやケータイを使うため、大規模なインフラ整備の必要がないという大きな利点を持っています。

例えば「家庭内での情報の共有」。家族の帰宅情報や留守電、来客の確認などの家電情報を、自宅内のパソコンがマイクロブログサーバとなって一括管理できます。「医療・介護」の分野なら、医療機器の端末からの情報を医師や家族がどこにいても共有でき、いつでも患者の様子が分かれます。もちろんツイッターですから「はやく良くなってね」「解熱剤を服用してください」といった気楽なやりとりもできます。地域ごとにマイクロブログサーバを置いて連携させ、災害時には位置の特定できる携帯電話へ最寄りのサーバから防災情報を流すこともできるでしょう。避難勧告などの公的なお知らせや現地の生の情報が、必要なエリアにいる時だけ届けられます。

「自治体・病院と大学との距離が近い香川のような地域に適した研究テーマです。プロジェクトでは現場に出かけて専門家や患者さんなどに話をうかがいますが、今の工学部生に求められている

のは、こういったやりとりから情報を掘り出すこと。細かいところに気付けば、違う視点のアイデアが浮かぶはず」と垂水教授。研究は現場を知っていてこそアイデアが出てくる、と考える教授は、フットワークの良い、他の大学と違うことができる「外に出る研究室」にしたいと考えています。

だから垂水教授の研究は、将棋教室の現場の雰囲気やネットワークに持ち込む「感想戦支援システム」を開発したり、趣味の音楽ライブ鑑賞やアーティストとの交流がきっかけになって、アーティストと現場のファン・遠隔地のファンをリアルタイムで繋ぐ研究を始めるなど「ありそうでなかった」ものばかり。

「私は情報工学の研究者として、みんながもっとつながってほしいと思っています。例えばライブの情報を誰に届けよう?と考えたとき、情報が欲しい人がどこにいるのかが分かりません。情報を本当に必要な人に届けたいという夢があります」

コミュニティコンピューティングが、ただのデータのやり取りでは終わらない「思い」を生み出そうとしています。

### KEYWORD

[コミュニティコンピューティング]  
コンピュータとネットワークを利用して、人と人とを繋ぐ技術のこと。ネット上のサービスと、それが実際の社会にどのような影響を及ぼすかを調査・研究することで、より効率よい情報共有や深い交流を行うことをめざす。



今回の撮影場所は、垂水教授がライブのリアルタイム動画配信を行ったライブハウス。動画を生中継で見たファンが感想をtwitterに書き込み、その声にアーティストが応える…ライブではそんなやりとりもあったそうです。



「小規模マイクロブログとクロスインタフェースの研究開発」を共同で行う中野さん(写真右)と。垂水研究室の社会人学生として、さまざまなプロジェクトにも関わっています。

研究は、現場に行かなきゃダメです



# 垂水浩幸

**PROFILE**  
たるみ ひろゆき  
工学部 信頼性情報システム工学科  
教授 工学博士  
専門分野：情報工学  
ネットワーク情報サービス